

イタリア・ルネサンス期の図書館と メディチ家のパトロネージ

Le prime biblioteche pubbliche e il mecenatismo medico nel Rinascimento italiano

森 田 義 之

MORITA Yoshiyuki

In questo saggio vorrei dare un'occhiata sulla fondazione delle biblioteche rinascimentali e sulle vicende del mecenatismo-collezionismo dei codici antichi nel Rinascimento italiano.

Come un risultato dell'entusiasmo per collezionismo dei codici preziosi da parte dei ricchi cittadini e umanisti fiorentini del primo Quattrocento, fu fondata la prima biblioteca pubblica aperta a tutti i cittadini di Firenze: Biblioteca di San Marco.

Il progetto fu promosso e realizzato da Cosimo de' Medici (il Vecchio) (1389-1464) con il disegno architettonico di Michelozzo nel 1444, accettando i 600 codici raccolti da Niccolò Niccoli che gli consegnò ai fiorentini alla sua morte.

La seconda biblioteca fondata dai Medici è Biblioteca Laurenziana che era progettata da Lorenzo il Magnifico (1449-92) ma era cominciata dal suo nipote Giulio de' Medici (Papa Clemente VII) nel 1523 (ma completata solo nel 1571). L'architetto fu Michelangelo Buonarroti (1475-1564) ed il suo progetto della *Sala di lettura* fornì un modello non solo alle biblioteche italiane ma anche a quelle di altri paesi europei nei secoli successivi.

(キーワード) mecenatismo-collezionismo medico (メディ家のパトロネージと収集活動),
biblioteca pubblica (公共図書館), Rinascimento italiano (イタリア・ルネサ
ンス), Niccolò Niccoli (ニッコロ・ニッコリ), Cosimo de' Medici (コジモ・
デ・メディチ), Lorenzo il Magnifico (ロレンツォ・イル・マニフィコ)

はじめに

「ルネサンス」という時代は、美術の歴史においてのみならず、書物の歴史、書物のコレクションと図書館の歴史においても画期的な時代であった。

書物とそのコレクションの歴史において、この時代（15-16世紀）に起こった画期的な出来事として、次の3つのことが挙げられる。

- (1) 都市生活の活発化にともない、書物の需用と生産が増大し、聖職者が独占していた修道院文化（ラテン語文化）にかわって、市民層に俗語本が急速に普及し、紙の普及にともない写本が産業化したこと。
- (2) 15世紀中頃のグーテンベルク革命、つまり活版印刷術の発明により、写本にかわる印刷本が全ヨーロッパに普及し、16世紀には写本文化を席卷したこと。
- (3) 都市の裕福な知識層の間で古典書籍のコレクション熱が高まり、古代の公共図書館の理念が再生したこと。その結果、フィレンツェでメディチ家のパトロネージによって近世で最初の公共図書館が創設されたこと。

I. 古代と中世の図書館

まず最初に、ルネサンス以前のヨーロッパの図書館の歴史を簡単にふりかえっておきたい。因みに、library（英）や libreria（伊）の語源はラテン語の liber（樹皮、本）に、biblioteca（伊）や bibliothèque（仏）の語源はギリシア語の bibliothēkē — biblion（本）+ thēkē（置き場）— にあり、Bible（聖書）の語源にもなったこの biblion は、小アジアのパピルスの貿易港 Byblos に由来するといわれている⁽¹⁾。

古代世界では、アッシリアのニネベの王宮（2万6千点の粘土板文書を所蔵）やエジプトの神殿に付属して図書館がつけられたことが知られているが、最も有名なのは、ギリシア末期（ヘレニズム期）にアレクサンドリアにムセイオン（Museion／王立学士院）の付属機関としてプトレマイオス1世によって創設された図書館（前3世紀）であろう。

王は、権力を駆使して、アレクサンドリアに入港するすべての船が積んでいた書物（パピルスの卷子本）のコピーを作って、原本を図書館に納めさせ、分類目録を作成し、その蔵書数は70万卷に達したといわれる（前48年、カエサルのアレクサンドリア攻略により焼失）。

古代ギリシア世界のもう一つの有名な図書館はペルガモンの神殿図書館である（図1）。アッタロス朝のエウメネス2世の創設（前2世紀）になるもので、アレクサンドリアの図書館と蔵書を競いあい、従来のパピルスの卷子本にかわって、羊皮紙の冊子本（codex／codice）を作らせたといわれる。羊皮紙のことを purchment／pergamēnus（Pergamon に由来）と呼ぶようになったのはそのためである。

ローマ時代にもヘレニズム王朝の図書館の伝統は引き継がれ、首都ローマには、皇帝たちの宮殿に30ちかくの公共図書館がつけられた。ローマ帝国領の地方都市にも、現地の執政官の個人的パトロネージによって、いくつもの図書館がつけられた（なかでもエフェソスのケルスス Celsus 図書館、ティムガドのロガティヌス Rogatinus 図書館、アテナイのハドリアヌス帝による図書館が有名である）。古代ローマ時代には、円形闘技場も劇場もバシリカも、皇帝や有力者個人が出資して造営する「パトロヌス *patronus*」の伝統があり、これが後にルネサンス時代のパトロネージとして再生することになるのである⁽²⁾。

古代の都市文明が崩壊して農村中心の中世の封建社会になると、学問文化の中心はキリスト教の修道院に移り、教会や修道院が書物の生産とコレクションの拠点になった。古代の皇帝や王の宮廷文庫の伝統も細々と続いてはいたが（カール大帝やシャルル5世の宮廷文庫が知られ、後者には約1,000冊の蔵書があったといわれる）、学問文化はラテン語を使用する聖職者の独占物となった。ヨーロッパ各地の主要な修道院には、写本室（スクリプトリウム *scriptorium*）と図書室が置かれ、修道士たちは聖書や教父たちの著作の写本に多くの時間を費やした。一方、12-13世紀に大学が創設され始めると、教会や修道院と並んで、大学も図書コレクションの拠点となった（オックスフォード大学、ケンブリッジ大学）。

1289年に、ロベール・ド・ソルボン Robert de Sorbon が、パリの学寮に約1,000冊の図書室（28の書見台をもつ）を附置したのが、ソルボンヌ大学図書館の前身といわれる。

中世の書物は、羊皮紙にペンで書かれた大型の写本（冊子本）で、しばしば豪華に装飾されたり厚い皮革や貴金属で装幀され、きわめて高価な貴重品であり財産であったため、その保存と紛失防止のために、本には鎖がとりつけられ、書棚や書見台に固定されていた（図2）。このため、中世の図書館は「鎖でつながれた図書館 (*chained library*)」と呼ばれている。

II. ルネサンス期における書籍コレクションと公共図書館の理念

イタリア・ルネサンス期（14-16世紀）が、ヨーロッパの書物とそのコレクションの歴史において画期的な時代であったことは既に述べたが、その背景には、12-13世紀以来の都市の勃興と「商業の復活」による都市生活の急速な発展、都市市民各層の知的要求の拡大があったことは言うまでもない。その結果として、ラテン語文化にかわる新しい俗語文学（ダンテ、ボッカッチョ、ペトラルカ等）が誕生し、民間の写本工房の活動によって書物が市民のあいだに普及し、またキリスト教文化にかわる古代の古典的教養（フマニタス *humanitas*）への憧憬が高まって、都市の君主や富裕知識人層のあいだで古典書籍のコレクション熱が高まったことが挙げられる⁽³⁾。

こうした新しい都市文化と古典文化の復興運動（ルネサンス）の中心地となったのが、都市共和国として政治的にも文化的にも「新しきアテナイ」「ローマの娘」を自覚していたフィレンツェであり、図書文化のルネサンスもまさにこのフィレンツェを中心に展開したのである。

フィレンツェにおける古典書籍コレクションは、「イタリア文学の始祖」とされる14世紀のペトルカ Francesco Petrarca (1304-74) とボッカッチョ Giovanni Boccaccio (1313-75) に始まり(彼らはすでに公共図書館の理念をもっていたことが知られ、ペトルカはヴェネツィア市に蔵書を寄贈する計画をもち、ボッカッチョはフィレンツェのサント・スピリト修道院にその蔵書を遺贈する)(図3)、14世紀末から15世紀にかけて古典収集熱は人文主義者や教養ある富裕市民のあいだで一段と高まった(コルッチョ・サルターティ Coluccio Salutati、レオナルド・ブルーニ Leonardo Bruni、カルロ・マルスッピーニ Carlo Marsuppini、ニッコロ・ニッコリ Niccolò Niccoli、ポッジョ・ブラッチョリーニ Poggio Bracciolini、ジャンノッツォ・マネッティ Giannozzo Manetti など)⁽⁴⁾。

なかでもニッコロ・ニッコリ (1364-1437) は、私財を投げうって古今東西の古典文献を買いあさり、約800冊にのぼる書籍を収集した。

ヴェスパシアーノ・ダ・ビスティッチ⁽⁵⁾ Vespasiano da Bisticci の『フィレンツェ著名人列伝 (*Le vite*)』は、彼の人となりとその収集活動について、次のように伝えている。

「ニッコロ・ニッコリはこのうえもなく誠実な両親をもつフィレンツェ人で、父親は裕福な商人であった。……父親はニッコロの幼少の頃、やはりかれも商人にしたいと思ったが、将来そうなったように学問を捨てられなかった。父親の死後兄弟から分かれて、勉学に専心するという意志を遂げることができた。相当な財産の分与に預かったので、早速商売を止めて、ラテン語に堪能であったかれはラテン文学に没頭しその道を究めた。大変博識なギリシア人マヌエル・クリュソローラスがフィレンツェに来ていたので、彼の門下に入り、ギリシア語に通曉した。……ニッコロは学芸に携わるすべてのものの父であり、保護者であり救済者であると呼ばれるにふさわしい人物であったといえよう。というのはニッコロはだれをも庇護し、学問には立派な報いのあることを示して皆にその道を奨励し、ギリシア・ラテンの書物でフィレンツェにないものがあると知るや、財産を投入して、いかなる出費も厭わずに何が何でも入手したので、フィレンツェにはニッコロの手によって購入されたラテン語の書物が無数にあるからである。あらゆる学者たちのあいだで大そう有名になったのでレオナルド〔ブルーニ〕氏は自作のキケロ伝をニッコロに贈ったさいにかれのことをラテン語の校閲者と呼んでいるほどである。(中略) 大量の書物を収集することに力を要れ、いかなる出費も意に介さず、どこからでもそれがあると分かれば八方手を尽くして入手した。収集のためには手段を選ばなかったので、大量の書物を集めることができたのである。それらすべてを父親の遺した財産で買い求めた。自分の生活に十分と思われるだけを残して、所有していた不動産を売り払ってすべてを書物の購入に当てたのである。……ニッコロの蔵書は、自分のためというより人の便宜のために所蔵されていたのである。なぜならギリシア・ラテンを問わず学芸に携わる人はみな書物を求めるのにニッコロの手を借り、だれにでもかれは書物を貸し与えたからである。…

フィレンツェからギリシアやフランスやその他の地方に出かける人があると、ニッコロはフィレンツェにはない書籍のリストを手渡すのが常であった。かれの自由になったコジモ・デ・メディチの財力で多方面から書物を集めたのである。たまたま書物そのものではなく、書物の写しを入手した場合には、草書体と楷書体の見事な書き手であったニッコリは、いずれかの書体で自らの手で写し取ったものである。それはサン・

マルコ僧院に収蔵されているニコロの両書体による手写本に見られる通りである。」

(ヴェスパシアーノ・ダ・ピスティッチ「ニコロ・ニコリ伝」)⁽⁶⁾

フィレンツェ随一の大家豪で後にコジモ・デ・メディチにより追放されるパツラ・ストロツィ Palla Strozzi (1373頃-1462) は、ギリシアから著名な古典学者マヌエル・クリュソローラス (1350頃-1415) を招いて、フィレンツェの大学にギリシア語講座を開設し、ギリシアから取り寄せたギリシア語文献の目録を作成させた (サンタ・トリニタ聖堂に図書館をつくる計画は実現しなかった)。

「ストロツィ家といえば数多くの優れた人物が輩出したたいそう高貴な家柄であるが、ノーフリ・デリ・ストロツィの息子パツラ氏もまた、そのたぐい稀な徳性によっておおいに家名を高からしめた人である。かれはラテン語とギリシア語にたいそう秀でており、たいへんな熱心さをもってこれらの研究に邁進した。学問が非常に好きで、これをたいそう重んじ、フィレンツェがかつて擁したいかなる人物にもましてこれを推進したのである。そして、フィレンツェではラテン語の書物についてこそ進んだ研究が行なわれていたもののギリシア学の方はそれほどでもなかったことから、ギリシア人マヌエル・クリュソローラスをイタリアに招聘すべく、必要な経費のほとんどを自ら負担しておおいに尽力したのであった。さて、クリュソローラスがこうしてパツラ氏の好意でイタリアにやって来てみると、そこには書物が不足していた。書物がなくてはどうしようもない。するとパツラ氏はギリシアに人を派遣し、すべての費用を負担して夥しい数の書物を買入れさせたのである。かれは挿絵入りのプトレマイオスの『宇宙論』やプルタルコスの『英雄伝』、プラトンの諸作品、その他おおぜいの著作家たちの書物をコンスタンティノーブルから取り寄せた。アリストテレスの『政治学』も、もしパツラ氏がコンスタンティノーブルからこれをもたらさなかったならばイタリアには存在しなかった。だからレオナルド・ブルーニ氏が『政治学』を翻訳したときも、かれはパツラ氏の持っていた版を使ったのである。そもそもパツラ氏がクリュソローラスをイタリアに招いたのは、レオナルド氏がギリシア学を学べるようにという配慮からであった。(中略)

かれは非常に学問を愛した人で、ギリシア・ラテンの書物については邸宅内にも、また外部にも当時のフィレンツェで最高の筆写家たちを雇っており、どのような分野であれ、入手できる書物はすべて買い入れていた。これはサンタ・トリニタ聖堂に立派な図書館を設立しようという意図を持っていたからで、その一等地に建設工事を始めていた。かれはその図書館を公共のものとして誰もが利用できるようにしようと考えていたのである。サンタ・トリニタを選んだのは、この聖堂がフィレンツェの中心にあって誰にとっても便利だったからである。この図書館には、聖俗を問わず、またラテン語のみならずギリシア語の書物も納められるはずであった。ところがかれの失脚という事態によって計画の実現が不可能となってしまったのである。」

(ヴェスパシアーノ・ダ・ピスティッチ「パツラ・ストロツィ伝」)⁽⁷⁾

こうした教養あるフィレンツェの上層市民のコレクション熱の高まりのなかで、最大のパトロンとして登場したのが、コジモ・デ・メディチ Cosimo de' Medici (il Vecchio) (1389-1464) であった。

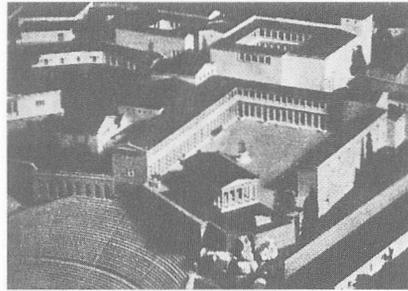


図4-1 ペルガモンのアテナ神殿とそれを囲む2層柱廊の模型。図書館は後方の柱廊左端の上層にあった

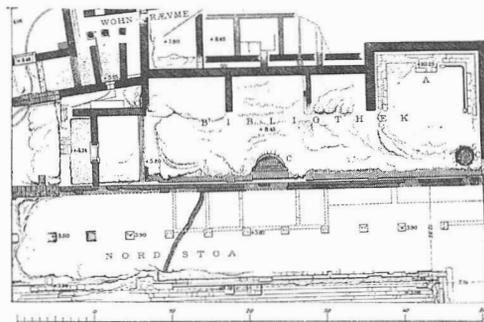


図4-2 ペルガモン図書館の平面図。大部屋Aは接待、集会などにあてられた。その左側に並ぶ3つの小部屋は書庫になっていた。部屋前のスペースは柱廊に守られていて、読書する人びとが巻物を繰く場所だった

図1 ペルガモン図書館

(出典/L. カッソン
『図書館の誕生—オリエントからローマへ—』 刀水書房)

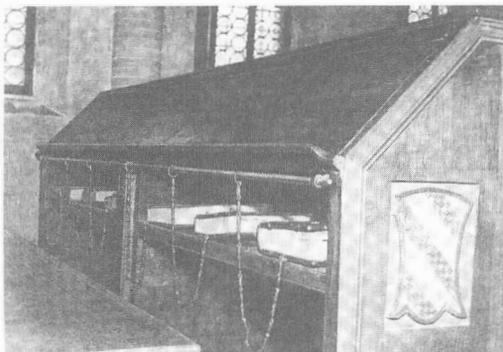


図2 「鎖につながれた図書館」

(出典/W. レーンシュブルグ
『ヨーロッパの歴史的図書館』 国文社)



ペトラルカ



ボッカッチョ

図3 ペトラルカとボッカッチョ

Ⅲ. メディチ家による図書館の創設

——サン・マルコ図書館とラウレンツィアーナ図書館

コジモは、15世紀におけるメディチ家の独裁体制を確立した大富豪＝政治家であり、ルネサンス・パトロンの代名詞ともいえる人物であるが、政敵のパツラ・ストロツィと同様、学者肌の非常に豊かな人文的教養の持ち主であった（ラテン語にも精通）。若い頃から外国を旅行してみずから貴重な写本を収集すると同時に、ニッコリやブラッチョリーニらの友人たちの収集活動を財政的に支援した⁽⁸⁾。美術や建築の偉大なパトロンであり、マルシリオ・フィチーノ Marsilio Ficino (1433-99) を中心とするプラトン・アカデミーを私的に援助して、フィレンツェをヨーロッパにおけるプラトン研究の拠点にしたことでも知られる⁽⁹⁾（図4）。

因みに、コジモ自身が集めた書籍には、ギリシア・ローマの歴史・哲学・文学（アリストテレスの全著作と註解、リウィウス、スエトニウス、プルタルコス、ウェルギリウス、オウィディウス、プラウトゥス、ケケロー、セネカ、クインティリアヌス等）から中世の教父や教会学者の宗教書までが含まれていたことが知られている⁽¹⁰⁾。

このコジモのパトロネージによって創設された近世ヨーロッパで最初の公共図書館が、サン・マルコ図書館（Biblioteca di San Marco）であった。

サン・マルコ図書館は、ニッコロ・ニッコリが全市民に公開することを条件としてフィレンツェ市民に遺贈した蔵書約600冊（6,000フィオーリーノ／およそ3億円に相当）を収蔵するために、コジモの出資によって創設されたもので、1444年に、建築家ミケロッツォの設計によって、ドメニコ修道会厳修派が所轄するサン・マルコ修道院の二階に設置された（図5）。

ヴェスパシアーノ・ダ・ビスティッチは、その経緯を「ニッコロ・ニッコリ伝」で次のように伝えている。

「ニッコロは大いに財をなして、あらゆる学芸の典籍を数多く蒐集し、在世中にはそれらの書物を誰にでも閲覧させたが、要請を受けなければ、見せなかった。だがかれは死後も生前と同様にすることを望んだので、遺言状によってこれを四十人の市民に遺贈し、必要のあるものが誰でも利用できるような公共図書館の設立をかれらが取り計らうことを望んだ。あらゆる分野にわたるギリシア・ラテンの典籍が八百冊であった。この四十人の市民は遺言人の意志を遂行するために、これらの典籍をコジモ・デ・メディチに贈呈して、サン・マルコ僧院にそれらが設置されるようにし、必要とする者は誰でも利用でき、各々の書物の表紙にはかつてニッコロの所蔵であったことが明記されるという条件で、公共の利用に供されるよう取り計らった。そして現在もそのままである。これらの典籍の価格は六千フィオーリーノにも上るものであった。ジャンノツォ・マネッティ氏が『養生訓』という書物を著したおりに、巻末で、ニッコロとその生涯に触れて、その不滅の功績に対し賞賛を惜しまなかった。多くの賞賛の辞の中で、この図書館に言及し、大いに誉め称えているのだが、ニッコロはプラトンやアリストテレスやテオフラストス以上のことをしたとさえ述べている。というのはプラトンやアリストテレスは、遺書の中で子息らや他の人びとに遺した財産に触れてはいるが、書物に



図4 コジモ・デ・メディチ (ポントルモ作/ヴァザーリ作)

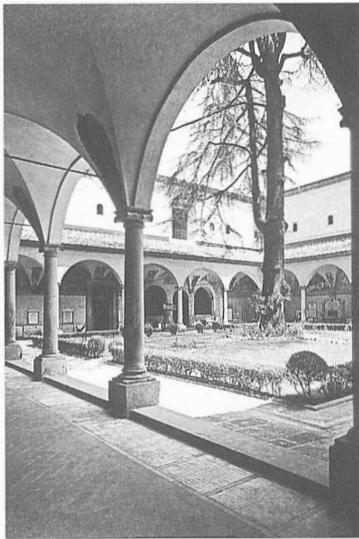


図5 サン・マルコ修道院



図6 サン・マルコ図書館

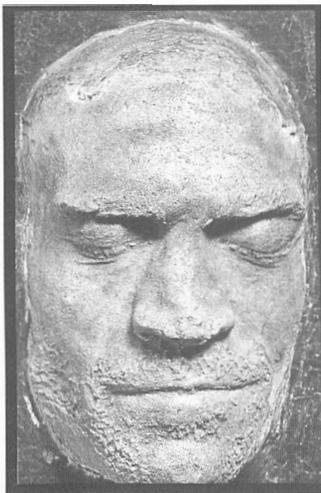
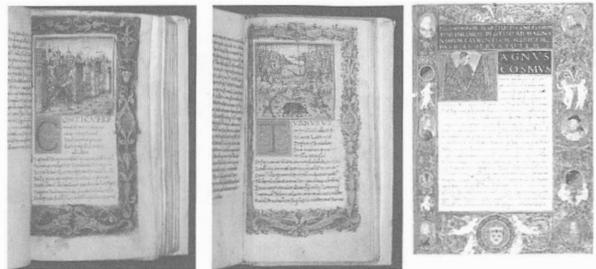


図7 ロレンツォ・デ・メディチ



ヴェリギリウスのアエネイス

フィチーノのプラトン翻訳書

図8 メディチ家の図書コレクション



図9 ロレンツォと人文学者サークル
(ジョルジョ・ヴァザーリ作)

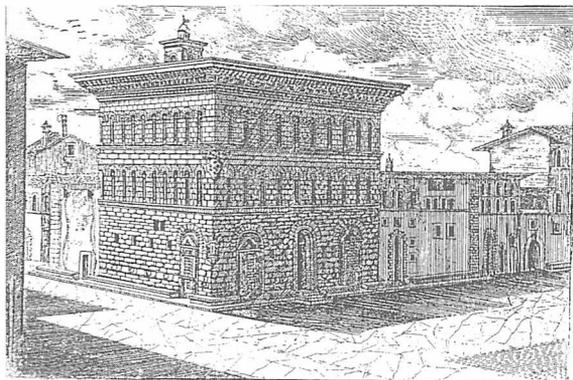


図10 メディチ邸



図11 メディチ家出身の教皇 レオ10世とジュリオ・デ・
メディチ (後のクレメンス7世) (ラファエッロ作)

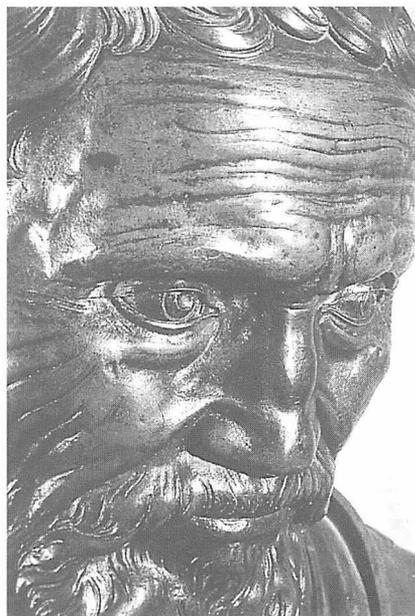


図12 ミケランジェロ・ブオナローティ
(ダニエーレ・ダ・ヴォルテッラ作)

については一切触れていない。テオフラストスは、個人的に親友一人に書物を遺している。ところがニココロは、その書物を誰もが利用できる公共のものとするのを望んだのであり、これこそ限りない賞賛に値するからであると。」 (ヴェスパシアーノ・ダ・ビスティッチ「ニココロ・ニコリ伝」前掲邦訳, 364-365頁)

サン・マルコ図書館は、縦48メートル、横11メートルの長方形プランで、列柱で三つに分節された小教会堂風の空間に64の書見台が置かれた(図6)。修道院という宗教的空間に付設されたこと、またもっぱら貴重な写本を閲覧するための場所としてつくられたことでは「中世的」な性格がよかつたといえるが、修道士専用ではなく、都市市民に開放された公共図書館であった点で、きわめて「近代的」かつ市民的な性格をもっていたことは強調されなければならない⁽⁴¹⁾。

コジモは、サン・マルコ図書館の蔵書の整理と目録作成を、かつての政敵パッラ・ストロツィによって支援を受けていた人文学者トマーゾ・パレントウチェッリ Tommaso Parentucelli (のちの教皇ニコラウス5世/1397-1455) に委ねた。そして、このパレントウチェッリは、やがて教皇となると、ローマのヴァチカン図書館の実質的な創設者となるのである⁽⁴²⁾。

サン・マルコ修道院は、この図書館のみならず、その建物のすべてがコジモの個人的パトロネージによって建設された(1434-44)。そして、コジモとも親しかった敬虔な画僧フラ・アンジェリコの壁画によって飾られることになるが、コジモは、この後にも、郊外のフィエゾレ修道院(バディア・フィエゾラーナ Badia Fiesolana) に宗教書の図書室を付設し、そのために書籍商ヴェスパシアーノ・ダ・ビスティッチに手配させて45人の筆写家を雇い、約2年間(22か月)で200冊の写本を作らせたと伝えられる。

コジモ・デ・メディチの図書コレクションは、後継者のピエロ・イル・ゴットーゾ Piero il Gottoso (1416-69)、そして孫のロレンツォ・イル・マニフィコ Lorenzo il Magnifico (1449-92)(図7)に引き継がれたが、特にメディチ家の蔵書の大幅な拡充に貢献したのはこのロレンツォであった(メディチ家の書籍コレクションはロレンツォが当主となった1469年には約250冊であったが、彼が死去した1492年には約1,000冊に増大した)(図8)。

ロレンツォは、15世紀末期のフィレンツェ・ルネサンス文化の「黄金時代」の立役者、偉大なパトロンとして、生前から「イル・マニフィコ」(豪華公)という尊称で呼ばれた人物である。また彼自身、祖父と同様、玄人はだしの人文学的教養の持ち主で、非凡な建築通、多作の詩人でもあり、みずから「万能の芸術家」(アンドレ・シャステル)としてつねに多くの学者、文人、芸術家たちのサークルの中心にいた人物である(実業家としては無能で、その晩年にメディチ銀行の没落をもたらすことになったが)(図9/10)。

ロレンツォは、増大したメディチ家の図書コレクションを収めるために、その菩提聖堂であるサン・ロレンツォ聖堂に新しい図書館を計画していたと言われるが、それが実現されるのは、彼の死の30年後のこと、ロレンツォの子の世代になってからのことである(1523年)。

メディチ家のパトロネージによってルネサンス期に建造された2番目の図書館、ラウレンツィアーナ図書館(Biblioteca Laurenziana)は、ロレンツォ・イル・マニフィコの甥の枢機卿ジュリオ・デ・

メディチ Giulio de' Medici (1478-1534/のちの教皇クレメンズ7世) (図11) によって計画され、建造が推進された。

設計を委嘱されたのは、当時、同じ聖堂内のメディチ礼拝堂に2つのメディチ墓碑を制作中だった大巨匠ミケランジェロ・ブオナローティ Michelangelo Buonarroti (1475-1564) である (図12)。

ミケランジェロは、周知のように、ルネサンス最大の彫刻家であり、ヴァティカンのシステリーナ礼拝堂に巨大な天井画を完成した大画家であり、のちにローマのサン・ピエトロ大聖堂の造営（とくにドームの建造）に深く関わることになる大建築家でもあったが、設計から完成まで、中断をはさんで約半世紀を要したこのラウレンツィアーナ図書館は（完成したのは巨匠の死後の1571年）、建築家ミケランジェロの最高傑作のひとつとなった。

ラウレンツィアーナ（ロレンツォ Lorenzo＝ラウレンティウス Laurentius の形容詞化）図書館は、メディチ邸のすぐ裏手にあるサン・ロレンツォ聖堂の中庭回廊二階に付設され、奇抜なマニエリスムのデザインによる有名な玄関室、サン・マルコ図書館より大きな規模（長さ50メートル×幅12メートル、80の書見台を付設）の長方形の閲覧室（列柱による分節はなく、天井は平らな格天井）、そしていちばん奥の稀観本室からなっている (図13)。

玄関室は、君主化したメディチ一族や宮廷の学者たちの荘厳な入場を念頭においたと思われる「落下する滝」のような堂々たる大階段 (図14) によって知られているが、閲覧室のシンプルな長方形空間と書見台のシンメトリカルな配置には近代的な機能性を予感させるものがある（木製の格天井とテラコッタ・タイルの豪華な床装飾は別人のデザインになるもの） (図15)。

ミケランジェロ自身による書見台のめずらしい素描が残っているが、書見台の構造にも彼が機能性を配慮していたことがわかる (図16)。一方、実現されることがなかった稀観本室の設計案（入れ子構造の三角形の迷路のような書見台のプラン） (図17) には、ミケランジェロの自由な奇想が横溢していて、もし実現されていれば図書館建築史においても特筆される傑作になったであろう。

フィレンツェでつくられた二つの図書館、とくにラウレンツィアーナ図書館は、ルネサンス後期の他の大都市の公共図書館のモデルとなり、ヴェネツィア、ローマ、ミラノなどで、都市の文化的威信のシンボル＝モニュメントとして次々に大規模な図書館が建てられることになる。

ヴェネツィアでは、ギリシア人枢機卿ヨハネス・ベッサリオン Johannes Bessarion (1403頃-1472) が遺贈した図書コレクションを収蔵するために、共和国政府の委嘱で、パラッツォ・ドゥカーレの向かい側の都市の最中心部に（サン・マルコ広場に続くピアツェッタに面して）、壮麗な古典主義様式のファサードをもつマルチャーナ図書館（Biblioteca Marciana；またはサン・マルコ図書館 Biblioteca di San Marco）が、ヤコポ・サンソヴィーノとヴィンチェンツォ・スカモッツィの設計で建造された (1536-83年/閲覧室の長さは27メートル) (図18)。

ローマでは、教皇シクストゥス5世の時代に、ヴァティカン宮殿内に教皇庁図書館/ヴァティカン図書館（Biblioteca Apostolica/Biblioteca Vaticana）がドメニコ・フォンターナの設計によって完成した (1587-88)。これは、15世紀以来、ニコラウス5世（トマーゾ・パレントウチェッリ）やシクストゥス4世によって営々と積み上げられてきた図書コレクションと図書館構想の帰結として、実現さ



図13 サン・ロレンツォ聖堂および修道院の平面図

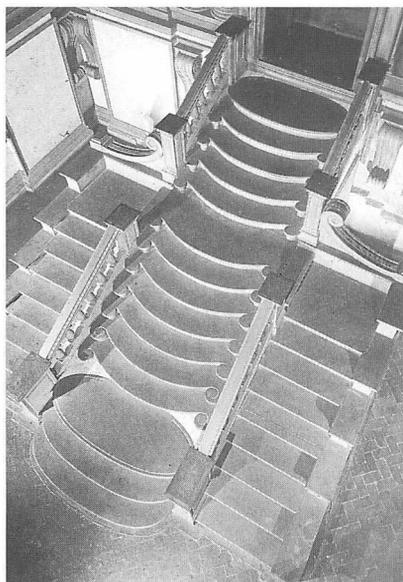


図14 ラウレンツィアーナ玄関室
(ミケランジェロ設計)



図15 ラウレンツィアーナ図書館
(ミケランジェロ設計)

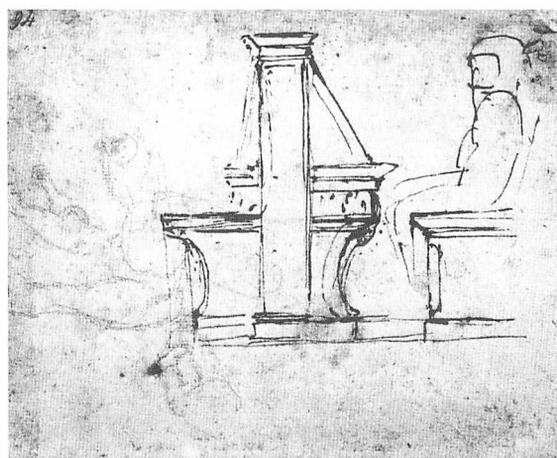


図16 ミケランジェロの書見台デッサン

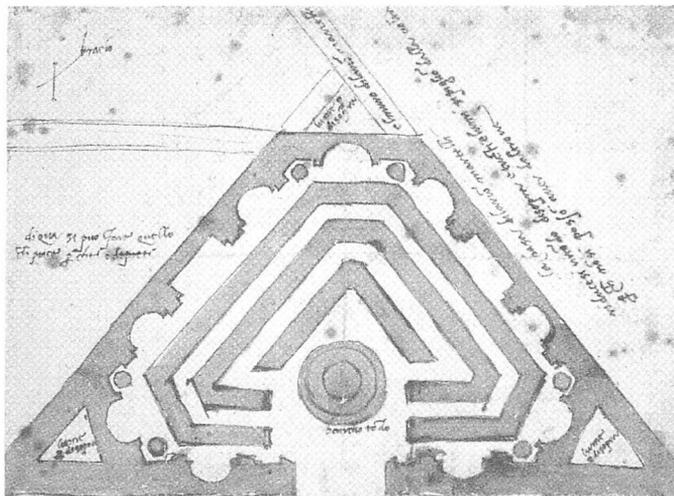


図17 稀覯本室の設計図（ミケランジェロ）



図18 マルチャーナ図書館（ヴェネツィア）



図19 ヴァチカン図書館



図20 アンブロジアーナ図書館

れたものである(図19)。

ミラノでは、1603-09年に、枢機卿フェデリーコ・ボッロメオ Federio Borromeo (1564-1631) によってアンブロジアーナ図書館(Biblioteca Ambrosiana)が創設された。これは絵画館を含むアカデミアの一部として建てられたもので、天井までの高い書架が閲覧室全体を取り囲むという新しい公共図書館のタイプを示している(図20)。

IV. 西洋近世の図書館の発展

イタリアの図書館の影響は、イタリア文化の吸収に熱心だったフランスやスペインの絶対君主国の宮廷にも伝播した。フランスでは、国王フランソワ1世が先代のルイ12世の図書館を継承拡充し、1537年には、フランスで刊行されたすべての本を1冊ずつ王の図書コレクションに収めさせる「納本制度」が始められた。

スペインでは、国王フェリーペ2世がマドリッド郊外に造営した壮大な宮殿＝僧院、エル・エスコリアル宮に、1567年頃、名建築家ホアン・デ・エレラ Juan de Herrera (1530頃-1697) の設計で壮大な宮廷図書館(長さ65メートル×幅11メートル)が創られた。しかし、カトリックによる宗教裁判と絶対王政の時代に入っていたスペインでは、図書館の公共性の理念や人文主義者による自由な書籍収集活動が変質と抑圧をこうむったことを忘れるべきではないだろう。

1559年のローマ聖庁による「禁書目録」の作成は、ルネサンスの人文科学研究(*studia humanitatis*)の発展のなかから生まれた市民的な公共図書館とその理念が危機にさらされたことを意味している。

しかし、その一方で、グーテンベルク革命による印刷文化の波及は、16世紀を通じてとどまるところを知らず、宮廷や大学の図書館と並んで、特に宗教革命後のプロテスタント国では、都市が創設する公立図書館(都市図書館)が発展し、ルネサンスに生まれた公共図書館の理念が市民社会にいつそう密着したかたちで継承されることになった。

そして、19世紀になると、フランス革命後の国民国家の形成にともない、国家の文化的シンボルとして、国立劇場や国立博物館・美術館と並ぶより壮大な文化的殿堂としての国立図書館(パリのBibliothèque Nationale やロンドンのBritish Museumの図書館など)が誕生することになる。日本の明治政府による帝国図書館(1896年、国立国会図書館の前身)はこうした流れのなかで創られたのである。

以上、ルネサンス期の図書コレクションと図書館の歴史を中心に駆け足で見えてきたが、最後に、ルネサンスの科学的人文主義の偉大な後裔でもあった17世紀の哲学者ライプニッツ(1646-1716)——彼はドイツのブラウンシュヴァイク大公の領主図書館の司書であった1689年に、フィレンツェのサン・マルコ図書館を訪れ、長年探していた14世紀の数学書 *Liber calculationum* の初版本を発見したことを、感激をもって友人に知らせている⁽¹³⁾——の言葉を引用しておこう。

「(a) 図書館は人間精神の宝庫となるべきである。独創的な思想はそれが書いたものとして定着している限りすべて保存しておく必要がある。… (b) 必要なのは年度ごとのしっかりした予算であって、これにより学術上価値ある新刊書すべてが「調和のとれた継続」として供給されねばならない。(c) 図書館の至上の職務は、その貴重な財産を、著作者、出版年を示す系統立った形の綿密な目録（必要ならば事項索引も）により利用しうるようにすること、それから公開の時間をできるだけ広げ、暖房、照明をできるだけ良くし、自由な貸出しをできるだけ広げて、利用しやすくすることである。」（ヨリス・フォルシュティウス&ジークフリート・ヨースト著『図書館史要説』藤野幸雄訳、日外アソシエーツ）。

いうまでもなく、ここには、現代の情報化時代の図書館にも通底する普遍的な理念と理想が息づいていると言えるだろう。

註

- (1) ヨーロッパの図書館の歴史的発展については次を参照。

V. M. Kerr, *Library: I. Ancient and Classical world II. Later Development*, *Dictionary of Art*, vol. 19, Grove, London.

ヨリス・ホルシュティウス/ジークフリート・ヨースト『図書館史要説』藤野幸雄訳（日外アソシエーツ、1982年）。

ヴィンフリート・レーシュブルク『ヨーロッパの歴史的図書館』宮原啓子・山本三代子訳（国文社、1994年）。

- (2) 古代の図書館については、とくに次の書を参照。

L. カッソン『図書館の誕生—オリエントからローマへ—』新海邦治訳（刀水書房、2007年）。

- (3) イタリア・ルネサンス期の図書館については、E. ガレン『ルネサンス文化史』澤井繁男訳（平凡社、2000年）第8章／図書館と印刷術の発明、87-101頁を参照。

- (4) コルッチョ・サルターティ Coluccio Salutati (1331-1406)。

14世紀の代表的な市民的人文主義者。ペトルルカの友人。フィレンツェ共和国の書記官長を30年以上にわたって務め（1375-1406）、ヴィスコンティ家のミラノの軍事的脅威に対してフィレンツェ市民の愛国心に訴える熱筆をふるった。すぐれたラテン語詩人であり、ダンテの『神曲』をラテン語に翻訳。著作に *De Iulio Herculis*（ヘラクレスの功業について）、*De tyranno*（僭主論）、*De fato et fortuna*（宿命と幸運について）がある。

- ・レオナルド・ブルーニ Leonardo Bruni (1370-1444)。

サルターティの弟子。アレツォ出身のため「アレティーノ」と呼ばれ、1427年以降、フィレンツェ共和国の書記官長となる。卓越したギリシア語学者として知られ、アリストテレスの『倫理学』『政治学』をラテン語に翻訳。著書として、フィレンツェの共和制と学芸を称えた *Laudatio Florentinae Urbis*（フィレンツェ市頌）、*Historiae Florentini populi libri XII*（フィレンツェ史12巻）、*De militia*（軍隊論）等がある。

- ・カルロ・マルスッピーニ Carlo Marsuppini (1399-1453)。

初期人文主義者の一人。優れたギリシア語学者として知られ、ホメロス《イリアス》第一巻をラテン語に翻訳し、教皇ニコラウス五世によって称賛される。晩年にフィレンツェ共和国書記官長を務める。

- ・ニココロ・ニコリ Niccolò Niccoli (1364-1437)。

初期人文主義者の一人。フィレンツェ最大の写本コレクターで、美術品のコレクターでもあった。コジモ・デ・メディチの親しい友人。著作は残しておらず、その人物像はとらえどころがない。

- ・ポッジョ・ブラッチョリーニ Poggio Bracciolini (1380-1459)。

サルターティの弟子で、著名なラテン語学者、人文主義者。教皇庁の秘書官として、ドイツのコンスタンツ公会議(1414-1418)に参加。その帰途に、クリューニーとザンクト・ガレンに旅行し、多くの写本を発掘した(キケロー、クインティリアヌスなど)。晩年、共和国書記官長を短期間務める。ラテン語の著作に *De avaritia* (食欲について) (1428)、*De infirmitate principum* (君主の不幸について) (1440)、*Contra hypocries* (反偽善者論) (1449)。俗語による著作に *Facetiae* (風刺集)、*Storia di Firenze* (フィレンツェ史) がある。

・ジャンノッツォ・マネッティ Giannozzo Manetti (1396-1459)。

人文主義者、政治家。ナポリ君主アルフォンソ・ダラゴーナの秘書官となる。著書に *De dignitate et excellentia hominis* (人間の尊厳と卓越性について) (1451-1452) がある。

(5) ヴェスパシアーノ・ダ・ビスティッチ Vispasiano da Bisticci (1421-1498)。

フィレンツェの書籍業者。コジモ・デ・メディチやフェデリコ・ダ・モンテフェルトロなどの人文主義的パトロンのために貴重な写本の収集や筆写を組織した。彼が晩年に著した15世紀フィレンツェ著名人列伝 (*Le vite, a cura di Aulo Greco, 2 vols. Firenze 1970-1976*; 抜邦邦訳『ルネサンスを彩った人びと——ある書籍商の残した『列伝』』岩倉具忠・岩倉翔子・天野恵訳、臨川書店、2000) には、以下のような多くの15世紀の教皇、君主、政治家、司教、人文学者が含まれている。

教皇エウゲニウス4世、教皇ニコラウス5世、ナポリ王アルフォンソ・ダラゴーナ、ウルビーノ公フェデリコ・ダ・モンテフェルトロ、アンブロージョ・トラヴェルサーリ、レオナルド・ブルーニ、ジャンノッツォ・マネッティ、ポッジョ・ブラッチョリーニ、マッテオ・バルミエーリ、カルロ・マルスッピーニ、ドナート・アッチャイオーリ、フランチェスコ・フィレルフォ、パッラ・ストロツィ、コジモ・デ・メディチ、アーニョロ・アッチャイオーリなど。

(6) *Vespasiano da Bisticci, op. cit., vol. 2, pp. 225-228* (前掲邦訳、355-356頁)。

(7) *Vespasiano da Bisticci, op. cit., vol. 2, pp. 139-147* (前掲邦訳、295-299頁)。

(8) 1414年、コジモ・デ・メディチは教皇ヨハネス23世に随行してコンスタンツ公会議に赴いたが(この公会議でヨハネス23世は廃位される)、その時同行したポッジョ・ブラッチョリーニは、帰途、スイスのザンクト・ガレン修道院でウィトルウィウスの『建築十書』など古代写本の歴史的発見をすることになった。この時の経緯をヴェスパシアーノ・ダ・ビスティッチは次のように記している。

「コンスタンツの公会議が開かれたおり、ポッジョ氏はそこへ赴いた。かれはニココロ[・ニコリ]と多くの学者から、消失した無数のラテン語典籍をかの地の修道院で探すのに一肌脱いでくれまいか、と懇願されていた。キケロの演説六篇を見つけた。かれから聞いた話ではそれは、ある僧院でごみの中にあっただと言ってもいいような、一山のばらばらになった本の間から見つけ出されたのである。

当初は断片に分かれて見出されたクインティリアヌスがついに完全なかたちに至った。それを入手することはできなかった。自ら筆を執って書き始めて三十二日をかけて書き写した。そこにはかれの手になる流麗な筆跡が見られた。一日にほとんど五枚綴り分[二十枚相当]を書き写した。長年にわたって失われていて、同じく断片だったキケロの『弁論家』、シリウス・イタリクスの英雄詩『第二ポエニ戦争』という立派な作品、天文学者のマルクス・マニリウスの韻文による見事な作品[『天文学』]、韻文による名著の誉れ高いルクレティウスの『物の本性について』、同じく韻文の秀作たるウァレリウス・フラックスの『アルゴナウティコン』、アスコニウス・ペディアヌスによるキケロの『演説』数篇の注解、ルキウス・コルメラの傑作『農業論』、コルネリウス・ケルスの見事な作品『医学について』、A・[アウルス・]ゲリウスの秀書『アッティカの夜』、テルトゥリアヌスの作品数点、スタティウスの詩集『森』を、それぞれ発見した。さらにエウセビオスの『年代記』をヒエロニムスとプロスペルスの増補とともに見つけて、自筆でこれを書き写した。コンスタンツでは、キケロのアックス宛の書簡も発見されたが、それについて私は寡聞にして知らない。レオナルド[・ブルーニ]とポッジョ両氏の刻苦勉強のお蔭で、ブラウトゥスの最後の喜劇十二点が見出され、それをパーゼルで校訂した。ヴェネツィアのグレゴリオ・コレールとポッジョ氏さらに他の人びとが校訂に携わり、現状の配列にした。キケロの『ヴェレス弾劾』も同様にコンスタンツで発見され、レオナルドとポッジョ両氏がイタリアにもたらした。レオナルドとポッジョ両氏のお蔭でいかに立派な典籍が発見されたか、したがって今世紀の文学者たちがどれほど大きな恩恵をかれらから被っているかが分かり、かれらからどれほど光明を与えられたかも知らされるのである。プリニウスもイタリアにはなく、ドイツのリューベックに一書存在し、しかも完結した欠落のないもの、との情

報を得たニコリは、コジモ・デ・メディチとともに大いに尽力した結果、かの地にいたかれの親戚のひとりを仲立ちにして、所有者の修道士たちと大きな取引をし、すなわちライン通貨百ドゥカートを与えた末、ようやくその典籍を入手したのである。」

（「ポッジョ・ブラッチョリーニ伝」前掲邦訳、238-239頁）

(9) コジモ・デ・メディチの学問、芸術、建築のパトロネージについては、拙著『メディチ家』（講談社現代新書、1999年）第3章を参照されたい。

(10) コジモ・デ・メディチの蔵書については、次を参照。

A. C. De La Mare, *Cosimo and his books*, in *Cosimo 'il Vecchio' de' Medici 1389-1464* (ed. F. Ames Lewis) (Oxford, 1992)

(11) サン・マルコ図書館については次の書を参照。

E. Garin, *La biblioteca di San Marco* (Firenze, 1999)

(12) ヴェスバシアーノ・ダ・ピスティッチは次のように伝えている。

「(かれは) 誰に対しても大きな度量を示し、自分の持ち物にけっして執着せず、吝嗇とはまったく無縁であり続けた。誰の望みであれ必ず叶えてやり、ギリシア語をこなす当時最高の筆写家を一人ならず抱えていて出費には頓着しなかったので、手元に残る金は一銭もなかった。自分の能力には自信を持っており、何事であれ実現させるつもりだった。彼が、出費が自由になるものならば書物と建築に凝りたいものだ、常々口にしてしたが、実際、教皇位に就いてからはこの両者をおおいに推進した。その頃は決して豊かではなかったが、それでも自分の作らせる書籍はすべてあらゆる面で最高のものであることを望んだ。さまざまな分野の書物を所有していたが、中でも非常に美しい十二巻本にまとめられた聖アウグスティヌスの作品は、新たに精確に編纂し直された素晴らしいものであった。(中略)

サン・マルコ図書館は整備しようとしたコジモ・デ・メディチが、揃えるべき蔵書について書き示す券を執ってくれるようトンマーソ師に依頼したのもこのような理由からである。彼がみずからの手で書き記してコジモに送ったのは、完備した蔵書を誇る図書館を作ろうとする者にとって不可欠な実に素晴らしいリストであった。その結果サン・マルコとフィエーゾレ大修道院の二つの図書館がかれの指示に基いて整備され、さらにウルビーノ公のコレクションとアレッサンドロ・スフォルツァ卿のそれが後に続いた。将来にわたっても、図書館を設立しようと志す者は誰であれ、恐らくこのリストに頼らざるを得ないことであろう。」（「教皇ニコラス5世伝」前掲邦訳、33-35頁）

(13) E. Garin, *op. cit.*, p. 7.

〔後記〕

本稿は、2007年8月1日に、愛知県立大学において開催された第61回東海地区大学図書館協議会・名古屋集会での講演「ルネサンス期の図書館とパトロネージ」の講演原稿に、大幅な加筆修正を加え、註を付したものである。